

救急整形外傷レジデントマニュアル 第2版

田島康介 ● 著

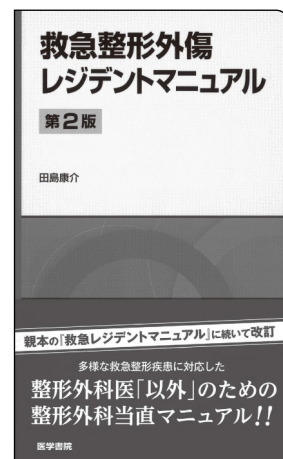
〔評者〕 千葉純司 (東女医大東医療センター教授・整形外科科学)

藤田医大病院は、毎年日本で最も多くの救急搬送患者を受け入れており、その中で、中心的役割を果たしているのが、田島康介教授である。田島教授のより早く、より正確な診察、診療には、われわれ整形外科医も、畏敬の念を抱いている。欧米では「外傷学」、「外傷整形外科学」が確立されているが、この分野においてわが国は、医療後進国と言わざるを得ない。その中で、田島教授は優れた指導者として、常に後輩医師達の指導に当たっており、本書は多くの症例経験を積んできた田島教授ならではの非常に論理的な内容の解説書となっている。

医療の対象は当然ヒトではなく人であり人間である。患者さんの人権尊重を医療行為の基本とすべきは言うまでもない。この姿勢から患者さんの信頼を得るあらゆる具体的行動が生まれる。診療技術の優劣が患者さんの治療成績や信頼関係に重要であり、高度な医療技術を維持する必然性もここから派生する。

医師の世界、特に大学は、何か硬直したピラミッド型の閉鎖空間のように世間ではイメージされているが、本当は言うまでもなくダ

イナミックで激しい競争社会である。医師であれば誰でも自分のレジデント時代には、良い意味でも悪い意味でもライバル意識をむき出して切磋琢磨したことを思い出すであろう。レジデントに限らず医療界全体が他に遅れまいと必死になっている。これが国内だけでなく、今は世界と競争しなければならないので、油断してしまう現実がある。もちろんこの競争が、医学を飛躍させ日本の高度な医療水準を維持している原動力なのであるが、その反面、過労死や倫理を逸脱した行為を多発させてしまっているのも事実である。これに加え整形外科などの外科系のレジデントには特殊な事情がある。ギプスの巻き方、メスの使い方、はさみの持ち方、糸結びの仕方などなどの職人的技術は、マンツーマンで教えなければ後世に伝わらない。土をこねて壺を形成し釜で焼いて不出来なら叩き割るというのはわけが違う。失敗は許されないからどうしても体に覚えさせる厳しい指導になる。医療という荒海でレジデント達が遭難しないためには、医師としての確固とした知識、技術、そして倫



理、哲学の一日も早い習得が不可欠であり、それが患者さんのためであり、ひいては自分のためでもある。「整形外科外傷治療」は片手間でできるほどやさしくはなく、厳然たる整形外科の専門分野であることに間違いないが、この本がレジデント達にとって、整形外科外傷学のバイブルになるものと確信している。

B6 変型・頁 192

2018 年 11 月

定価：本体 3,500 円＋税

[ISBN978-4-260-03688-7]

医学書院 刊